

ベルナール・ビュッフェ回顧展 私が生きた時代

Bunkamura ザ・ミュージアム(渋谷) 2020. 11. 21～2021. 01. 24

「ベルナール・ビュッフェ」(1928～1999)は、20世紀後半のフランスを代表する具象画家で、刺すような黒く鋭い描線によるクールな描写を特徴とする画風は、第二次世界大戦直後の不安と虚無感を原点とし、「サルトル」の実存主義や「カミュ」の不条理の理想と呼応し一世を風靡したことで知られている。

本展は、画伯のまさに類例のないほど波乱に満ちた回顧展として、“私の生きた時代”とし、1973(昭和48)年に実業家「岡野喜一郎」が収集し、静岡県・長泉町に開館した「ベルナーナ・ビュッフェ美術館」の所蔵作品を中心に「約80点」の画伯の虚無感を写した鋭い視線の油彩が勢ぞろいしている。

ベルナール・ビュッフェ 《ピエロの顔》 油彩/カンヴァス 1961年



画伯がキリストと同様に繰り返し描いたモチーフのピエロは、厳しい表情で見るものを正視する道化師で繰り返し描かれている。

この自らをメークして描いた自画像で、真中から下方に鋭角的なサインを大きく描いて画面全体のバランスをとって、鮮やかな色彩と力強い輪郭線は、具象画家としての地位と名声を入手した豊さを象徴している作品である。

ベルナール・ビュッフェ 《カルメン》 リトグラフ 1962年



画伯は、若い時から天才画家として名高く、硬質で鋭く太い針金のような輪郭線で、モノトーンに近い色彩で、独自の様式で描かれる作品を特徴とする代表作として有名である。

女性像のモデルは最愛の妻「アナベル」で、人物の不安げな表情などと相まって、戦後の作者の不安で荒涼とした心象風景が表されている。

画伯は、油彩画のみならず、優れた「版画」も数多く制作しているが、あまりにも早い時期に名声を得たために、後年の作品にはややマンネリ化の傾向が指摘されるなど厳しい見方もある。